

すっかんぽ。

11月号

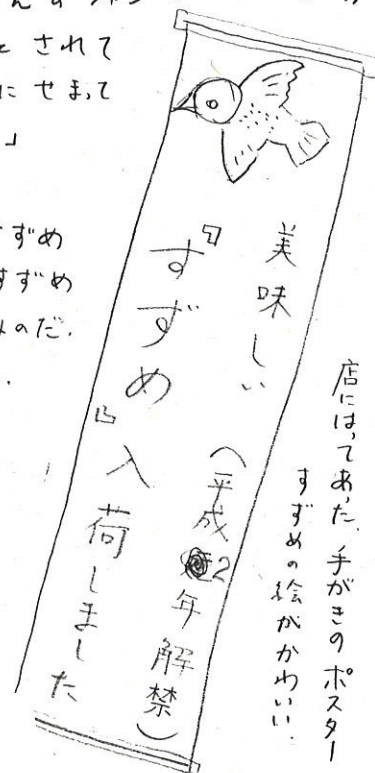
がんばれ! 寒すずめ。



むむっ、この物体は何だ? 一見エイリアンのくしさしのようなだが、実は君たちにも身近な「すずめ」のなれの果てなのだ。きも悪い〜。残酷という声もきこえきこえうだが、これは、佐野では一軒の焼き鳥屋でしかおめにかかることができない。しかも冬だけである。(ところで、この店は、おばちゃん一人でやっているが、実は大宮先生も真鍋先生も、このおばちゃんファンなのであるよ。)

そこで今回は、初冬のころから、焼き鳥とされてしまう、悲しくもけなげな「すずめ」の生態にせめてみることにした。題に「がんばれ! 寒すずめ」

★さて、野鳥の研究者は日本にもたくさんいるが、すずめの専門家となると、あまりいないらしい。だから、すずめのことが、少しづつわかりだしたのは、ごく最近のことなのだ。(といっても、ここ10年くらいの間だが...) それによると、すずめには、2つの生活パターンがある。一つは、人家の回りに一定のなわばりを持ち、巣を作り、子育てをする定住すずめで、もう一つは、定住すずめの産んだ子が、大群を作り、全国と移動する放浪すずめである。



君たちの家の回りで、朝、チュンチュン さえずっているのは、安定した生活をしている 定住すずめ なのだ。この場合、1つがいのすずめのなわばりは、決まっているで、容易に新顔が入りこむことはできない。となると、自分の産んだ子も、やがては、親もとから離れて、自分のなわばりを見さがなくては、ならないのである。1つがいは、春に3~5個の卵を産み育てるが、1シーズンに2,3回産卵するので、1年間に6~10羽の子どもを育てることになる。また寿命を4,5年とすると、一生の間に30~40羽の子どもがふえるのだ。しかし、実際、こんなにふえてしまえば、そのなわばりはすずめだらけになってしまう。そこで、その年生まれた若いすずめは、夏〜秋にかけて、大群となって各地を放浪するのである。

例えば、10月ごろ JR 栃木駅の近くを通ったことがあったが、その時は、電線や木にすずめが、びっしりとまわっていた。それは、何千という数だったと思う。ものすごい鳴き声で、なにごとかと上を見上げる買い物客が大勢いたように思う。実は、あのすずめの大群こそ、安住の地を求めて放浪の旅にでかけようとしていた。あつた、旅の途中の、今年生まれの若いすずめたちだったのだろう。それでは彼らは、どこへ行くのか。

★私の大学時代の後輩で、野鳥の研究をしているF君という人がこの問いに答えてくれた。F君は群鳥で高校の先生をしているのだが、野鳥に足輪をつけるバンデイングのライセンスを持っている。このライセンスがないと、かたに足輪をつけることはできないのだ。(なかなかライセンスはとれない) すずめの移動の研究は環境庁から委託されて、鳥類研究所 というところで行なわれており、毎年ライセンスを持つ人が許可を得て、すずめを捕獲し、足輪をつけてはなす。そして、どこかで再捕獲した時に、足輪の番号を見れば、どこから飛んで来たかがわかるしくみなのだ。



★ F君がバンディング(足輪をつけること)している場所は、館林市内の渡良瀬川の河原である。あしという植物が繁っていて、そこを今年生まれ

のすずめが寝ぐらにしているというのである。その数は10万羽とこえる。というから、おどろきである。昼間はえさを求めて、水田付近や街へでかけていて、夕ぐれ時にいせいにあし原の寝ぐらにもとどってくる。しかもそのもとどってくる道が決まっているので、そこに網をはておくと、次つぎにかかってくるのだ。30分くらいの間に20mの網に100羽以上かかる。そして、その一匹一匹に、足輪をつけるという気の遠くなるような作業も何日も続けるのだそうだ。こういうことが全国各地で地道に行なわれているのである。その結果、新潟で捕獲されたものが北海道でバンディングされたものだったり、新潟でバンディングしたものが、和歌山で再捕獲されたりしていることがわかってきた。つまり、木々の葉が落ち、えさも少なくなってくると、なるべく暖かい南の方へと、何万という大群が移動を開始する。その間、定住型のすずめは欠員が生じた時、(寿命や、他の島にくわれてしまった時、そのすずめのなわばりが狭く)運のいい、放浪すずめが、そのなわばりを、そくろうけつぎ、定住生活に入れるのである。しかし、もしなわばりの空きがなかったら……

実はほとんどの放浪すずめが、そうなのだが、……死にゆく運命にあるらしい。こうして、若すずめは定員補充の旅をつづけているのである。死んでゆく多くのすずめには気の毒だが、こういうシステムがあるからこそ、強いすずめが、繁栄していくことができるのである。また、死んでゆくすずめの多くは、他の島に食われてしまうのであるが、これもまた、生態系という大きなわくの中では、必要なのである。

我々がふだん何気なくみているすずめは、こういう激戦をのりこえてきたかなり運のいい連中なのかもしれないわ。

★ 長期に F君に「焼き鳥は好きですか?」ときいてみた。さて、みなさん、その答えを あてて下さい。

- ① 「鳥を焼いて食べるなんて、ゆるせない! ニワトリでもだめ!」
- ② 「ニワトリのように、人間が飼育しているものは、野菜と同じだから食べてもかまわない。しかし野鳥は食べる気にならん!」
- ③ 「私は鳥が好きです。だから食べるのも好き。ニワトリでも すずめでも 何でも食べていい!」

さて、さて、わかりましたか。何となく、②かなと思いかすですが実は、やはり②です。そうすると、すずめを食べている我々生物担当の3人の教師の立場はどうなるでしょう。

- ① 「野鳥の大敵! もう絶交だ!」 (立場がない)
- ② 「そんなに、おいしいなら、どれ、食べてみ、かな」 (立場が有利)
- ③ 「人様のことまで、言うつもりありません」 (立場、複雑)

私も友人も失いたくなかったので、おろおろ、遠まわしにきいてみたところ、何となく、③、ほい感じでした。一安心、といったところだが、やきとり屋のおばちゃんの名誉のために、すずめの捕獲(毎年、害鳥駆除として100万羽程許可されている)がすずめの個体群にどれくらいの痛手を与えているのか、きいてみることにした。それによると、佐野にいるすずめ(若すずめも含む)だけでも100万羽くらいいるので、全国で^{あわせて}100万羽捕獲しても、それはまさに「すずめの涙」ほどで、全く無視してもいい数だ、という話だった。

これから、「寒すずめ」を食べることは、仲間が無事、定住できることと一のりながら、味わうことにしよう。そして、このことは、F君の前では、話さないようにしようと思った。